

『扶氏經驗遺訓』初訳本と

刊本の異同について

中村 昭

『扶氏經驗遺訓』はドイツのフーフェランド C.W. Hu-

land の原著の第二版（一八三六年）の蘭訳本（一八三八
年、天保九年）を緒方洪庵が天保十年か十一年に入手し、
直ちに翻譯を始めて、天保十三年（一八四二年）には一応
訳し終ったものである。フーフェランドは当時のヨーロッパ
でも名医と評判のあった人であり、その畢生の名著がこ
のように早くわが国にもたらされ、しかも速やかに訳され
たことは驚くべきことだったが、この訳書も当時の蘭方医
書の出版規制に災されて、実際に出版が認められたのはそ
れより十五年後の安政四年（一八五七年）であった。その
経過は緒方富雄氏の著書に詳しく述べられている。

ところで安政四年の刊本には訳者の洪庵による凡例が天
保十三年の日附で載っているが、これは実はそれ以後に書

き替えたものである。何故なら、この凡例には病名は『病
学通論』によると書かれているが、『病学通論』は嘉永二
年（一八四九年）に出版されたものであり、天保十三年の
頃には洪庵はこれを『原病約論』という書名で訳述を進め
ていたからである。従って洪庵は初めの訳稿から病名と凡
例を書き替えたことは明らかだが、その他の面ではどうだ
ったのだろうか。

演者は数年前に古書店から『扶氏經驗遺訓』の写本を入
手したが、この凡例には『原病約論』の文字が記されてお
り、又その文章も刊本とはかなり違う所がある。更に本文
を刊本と比較して見ると、内容的には同じなのだが、文章
の構文や用語において相当の違いがあることがわかった。
つまりこれは『扶氏經驗遺訓』の初訳本の写本と思われ
る。この訳書が刊行される以前に写本で流布したというこ
とは言われているが、それと刊本との異同について述べた
論著は見当らない。

緒方富雄氏は洪庵の師匠の坪井信道が『經驗遺訓』の訳
稿を見て、文章を練り直す必要があると手紙に書いたこと
を紹介しているが、この写本と刊本を比較すると出版が十

五年間遲滞した間に充分改訳されたように思われる。この改訳には洪庵の義弟の郁蔵がかなり力を尽したらしく、初訳は洪庵一人の名前だが、刊本では郁蔵の名前も記されている。

刊本と初訳本の相違を記述すると、まず刊本の凡例で、

「書中ノ理論率ネ病学ニ拠レリ、学者宜シク病学通論ニ就テ之ヲ考索スベシ」

という所は、初訳本では、

「編中理論率ネ原学ニ拠ルガ故ニ、学者宜ク原病約論ニ就テ之ヲ考索スベシ」

となっており、又同じく刊本の凡例で

「書中毎病編首ニ徵候ヲ挙ゲ、次ニ原由ヲ論ジ、終リニ治法ヲ示ス」

という所は、初訳本では次のようになっている。

「編中毎病必先始ニ看法ヲ挙テ、次ニ原病ヲ掲ゲ、終ニ

治法ヲ示ス、看法ハ原語実亜個之矢私（振り仮名は演者）、本ト病ヲ弁知スルノ法ヲ云フ、原病ハ原病論把多傑尼論ノ起因ヲ推知スルノ法ヲ云フ、治法ハ原語的刺必、病ヲ治愈スルノ法則ヲ云フ」

本編は刊本では二十五巻、初訳本では十五巻となっているが、初訳本の内容が少ないのではなく、刊行に際して巻を分けて多くしたのである。文章や用語はかなり違いがあり、初訳では正確な訳を心がけたようだが、刊本では日本語として読みやすい文にしたと思われる。又訳注は刊本の方が整備されている。

刊本の訳注で明らかに初訳以後につけたことがわかるものがある。それは痘瘡の巻の変痘の項で、カンスタット氏の

一八四八年版から訳したという相当長い引用文である。後で、もちろん初訳本にはこの訳注はない。一八四八年は

『病学通論』ができた頃である。だから想像すれば、洪庵は『病学通論』完成後に義弟郁蔵の協力を得て、『経験遺訓』についても一回練り直したのではないだろうか。

本編の後の薬方編は大体同じだが、刊本ではここに出てくる薬名のうち遠西医方名物考や和蘭薬鏡に載っている薬品には、図とか鏡とか注をつけて参照できるようにしているのに対して、初訳本ではそれがなされていない。

さらに刊本ではこの後に附録三巻があり、これは補注として訳者が附したのだが、初訳本ではこれがない。初訳の段階ではそこまで作らなかつたのだろう。

以上のようにこの初訳本は未定稿の性格を持っているが、これと同系統の写本として、佐倉順天堂旧蔵本と土肥慶蔵氏旧蔵本があることを確かめた。未定稿のまま筆写され利用されたものと思われる。

(七沢リハビリテーション病院診療部)

三瀬諸淵訳『愈里伊羅安検査書』 について

会田 恵・寺畑 喜朔

本書は『和蘭語尿検査書』が三瀬諸淵により訳述された筆写による和書で、三十二頁と巻末に不審として二頁の覚え書きが付してある。慶応大北里記念医学図書館の富士川本の一冊以外は知られていないものと考えられる。

本書を寺畑が尿検査書として既に十年前に年代不詳として着目しているが(日医史昭五十二・二十三(二二二五)、最近我々は共同調査をすすめた。訳出の時期と原本は不明であり、未刊行で訳稿をまとめた程度のものともみられる。内容の化学的記載など、我が国近代医学の臨床検査受容の濫觴として意義深い訳本であり、巻末の覚え書きは当時の全く新しい医学検査にとまどっている状況も伝え(スライド説明)貴重な資料と考えられる。

冒頭には病床教授ユリーラー検査書と題してあり、次に